

一、次の①～⑩の——線部について、漢字をひらがなに、ひらがなを漢字に改めなさい。

① 内閣が総辞職する。

② 冷静にとらえる。

③ はげしい論戦となる。

④ 地震の前兆。

⑤ 消灯時刻を守る。

⑥ ゆうえきな話を聞く。

⑦ 書物のかんこう。

⑧ せいきんを納める。

⑨ 学問にこころざす。

⑩ ぎかいを開く。

二、次の①～⑤にある五つの慣用句のうち、□に同じ文字が入らないものが一つずつあります。それを1～5から選び、番号で答えなさい。

① 1、□を切る。

2、□をすべらせる。

3、□につく。

4、□をつぐむ。

5、□に運ぶ。

② 1、□にかける。

2、□持ちならぬ。

3、□を焼く。

4、□を明かす。

5、木で□をくくる。

③ 1、□で使う。

2、□が痛い。

3、□を傾ける。

4、□をすます。

5、□をそろえる。

④ 1、□が肥える。

2、□に銘じる。

3、□がない。

4、□星をつける。

5、□を光らす。

⑤ 1、□を打つ。

2、□を長くする。

3、□がおどる。

4、□に刻む。

5、□が痛む。

三、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で本文には一部省略した部分がある。

最近では「自然との共生」「生きものとの共生」という言葉が、注らんよう濫用されている。

だが、この「共生」という言葉は、わかったようでわからない。ただ、この言葉を使うと、注めんざいふ免罪符が得られたような開放感

と晴れやかさが伴う。だから流行っているのだろう。

人間以外の生きものの世界での「共生」とは、ほぼ対等の関係である。

イ

、アリとアブラムシの共生が有名だ。アリはアブラムシの出す排泄物である甘露を吸うために、アブラムシに接近する。一方アブラムシは、アリが身の回りにいるために天敵が近づかなくなり、身の安全が確保できる。

ロ

人間と生きものの関係がもつとも親密な農業の世界で、百姓と生きものの共生が成り立っているかどうか考えてみよう。

人間は稲という生きものを栽培して、米として食べる。稲は人間に栽培してもらい、生長しているように見える。「そうです。食べられる前に、半年だけは百姓の仕事によって、生きることができた」と稲が言ってくればいいのだが、

ハ

そんなことを稲が言ってくれるだろうか。現代人はただ自分のために稲を栽培しているのである。これは共生ではなく、単なる生産である。

二

、かつては、百姓の中に「稲のために、稲の種をまき、育てる」という気持ちも半分はあった。

稲にいち病が出たでしょう。百姓は心配する。その心配は、いち病によって、被害が出て減収し、所得が減るという心配でもあるが、それよりも前に生じる感情が根底にある。それは、稲が「かわいそう」だと思ふ感情だ。自分の心が、痛むのである。

ホ

、農薬散布をすすめる人たちは、経済的な損失を防ぐことだけしか考えない。農薬の普及を、経済的な動機によるものとししか見ることができない。

人間も生きものの一員であるという日本の伝統文化が、稲との対話を可能にしたのであって、現代的な科学からは、そのようなものが生まれるはずはない。

次に「害虫」との共生を考えてみよう。

「害虫などと、共生するつもりはない」と、^①現代の百姓は言うかもしれない。しかし、害虫がいるからこそ、その天敵が育ち、ただの虫が育ち、めぐりめぐって稲にも恩恵が及んでいく。そう考えると、稲が害虫をわざわざ引き連れている理由がわかる気にならないだろうか。田畑で、カネにならないものがたつぷり生産されている原因が、ここにあると思えば、おろそかにはできない。

現在では、多くの生きものが、一方的に人間のために命を捧げている。百姓なら、まだ自分が殺したと、実感することもある。そこで、生きもののために、人間（自分）のある部分を犠牲にしなければいけない、という考え方もある程度は理解できるだろう。しかし、そのためには、何を犠牲にするかが見えなくてはならない。それが見えるようになれば、犠牲ではなく、喜びに変わるだろう。

まずは、田畑に足繁く通うことである。近代的な時間を犠牲にして通うことである。それは、人間にとって、真の「共生」を実現するために必要なことなのである。

友人の話を紹介しよう。

彼の田んぼは、都市近郊にあるのだが、その真ん中を二十一メートル幅の「都市計画道路」が通ることになった。彼は、それに反対している。ところが、反対運動は思うように盛り上がらない。

なぜなら、地域の住民はこんなふうに使っていたからだ。

「四〇パーセントも減反しているぐらいだから、田んぼは余っているのではないか。それなら道路でつぶされても問題ないのではないか。それよりも道路のほうが大切だ。米だって、べつに地元でとれたものである必要はないだろう。スーパーに行けば、新潟県のコシヒカリがいつでも手に入るわけだし」

そこで友人は、「田んぼを守ろう」というスローガンを降ろし、新しいスローガンを掲げることにした。そのスローガンとは、「メダカの泳ぐ小川を守ろう」である。

彼は、小さい頃^{ころ}から、田んぼの横の水路にメダカがいることは知っていた。そのメダカの力を借りようと気づいたところが、彼のすごいところだ。

すると、今まで関心を示さなかった人たちからも、「まだこんな近所にメダカがいたんですか。そんな小川なら、道路よりも大切なかもしれない」という反応が出てきたと言う。

この話をどう思うだろうか。

ほとんどの百姓は、こういう話を不愉快^{ふげき}に思うだろう。田んぼの価値は、米で表現されてきた。百姓の価値も食料の生産で評価されてきた。そう思ってきたのに、「田んぼはいらないが、メダカの泳ぐ川は守りたい」と国民に言われたら、「それじゃあ、田んぼは、米はいらないのか」と言いたくなるだろう。

しかし、その田んぼや米を守るために、メダカの力を借りなくてはならないのである。もう百姓の力だけでは、田んぼは守れない。いつのまにか、国民の間に^②大きな価値^{けんか}転換^{てんかん}が起き始めているのである。

このことに、多くの百姓がまだ気づいていない。農業関係者に至っては、もっと気づいていないかもしれない。

友人の話を続ける。彼は、住民に呼びかけて、メダカの観察会を開き始めた。そこでこう語った。

「この小川のメダカは、田んぼで産卵^{さんらん}します。だから、メダカを守るためには、田んぼを守らないといけません。でも、この田んぼでとれた米を誰^{だれ}も買ってくれないなら、この田んぼはいらなくなります」

ここには、小川の両側の田んぼでとれた米を買うことが、メダカを守ることになるという新しい論理が示されている。

これは曙^{あけぼの}であろう。この日本では、いつの頃からか、食べものが、カネさえ出せば手軽に手に入るようになってしまった。そのために、目^③に見えなくなってしまう価値^{かち}に夜明け^{よあけ}が訪^{おもむ}れたのだ。

実は、^④同じような試みが全国各地で繰^{くり}り広げられ始めているのである。コウノトリ、トキ、ガン、ハクチョウ、ゲンゴロウ、レンゲ、ヒガンバナなどの力を借りて、農の価値を取り戻^{もど}そうとする実践^{じっせん}が根づいている。

二〇〇〇年から、「農と自然の研究所」が全国に呼びかけている「めぐみ台帳・生きもの目録づくり」運動は、徐々^{じょじょ}に各地で定着している。生きものに目を向ける活動は、趣味や道楽ではなく、農がカネにならないものまで生産していることを確認する新しい「仕事」である。だからこそ、百姓がやらなくてはならない。

再び友人の話に戻ろう。彼はこう約束している。

「この田んぼでとれた米を買う人は、この田んぼを自分の田んぼと思って、いつでも入っていいですよ」

彼の田んぼには、週末になると、何組もの家族連れがやってきて、メダカやゲンゴロウやトンボやカエルを追いかけている。その日の夕餉^{ゆづけ}にはこういう会話が交^かわされているそうだ。

「お父さん、このごはんがとれる田んぼに初めて行ったね」「そうだよ。このごはんは、あの田んぼでできたんだね」「メダカがいっぱいいいたね。それにゲンゴロウもいたね。トンボも害虫もいたね。ツバメも飛んできたし、田んぼって、いっぱい生きものがあるんだね」「また、来週行ってみようか」「うん」

メダカは、百姓にこう言っているのではないだろうか。

「あなたたち百姓は、今まで私たちをさんざん無視してきたくせに、今頃になってやっと価値が見えてきたようですね。でも、いいですよ。大いに私たちを利用しなさい。私たちも^⑤一肌脱^{ひとただぬ}きましよう。だって、あなたが農業でなくなれば、私たちメダカも死に絶えるしかないのですから」

^⑥これこそが、真の「共生」というものだろう。

つくづく百姓は幸せだと思ふ。工業製品なら、こういう応援団^{おうえん}は存在しないだろう。^⑦百姓が農産物だけではなく、自然も生産し続けてきたことが、こうして報われようとしているのだ。

(宇根豊『国民のための百姓学』より)

注 ○濫用…やたらに用いること。 ○免罪符…罪を取り消す証書。 ○夕餉…夕食。

問一、——「イ」「ホ」に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の1～5から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- 1、それでは 2、それでも 3、ところが 4、はたして 5、たとえば

問二、——①「現代の百姓」とあるが、「現代の百姓」はどのような農業をしているか。空欄に入る言葉として最も適当なものを次の1～5から選び、番号で答えなさい。

の力を使って生産を増やす農業

- 1、自然 2、伝統 3、科学 4、害虫 5、共生

問三、——②「大きな価値転換」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを次の1～5から選び、番号で答えなさい。

- 1、田んぼの価値が米という生産物だけでは評価されなくなってきたこと。
- 2、百姓はあとつぎに恵まれず高齢化が進んで田んぼを維持できなくなっていること。
- 3、国民は自国で生産された食べ物を望まず、おいしければどの国で作られたものでもよくなっていること。
- 4、田んぼのある伝統的な光景を、国民は求めなくなってきたこと。
- 5、国民が米に対して、他にはないおいしさを求めるようになってきていること。

問四、——③「目に見えなくなってしまった価値」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを次の1～5から選び、番号で答えなさい。

- 1、お金を出せば食べものが手に入ること。
- 2、農業が自然を育てる働きをしているということ。
- 3、食べものには百姓の努力がつまっているということ。
- 4、食べものはたくさんの人の手をへて届けられるということ。
- 5、田んぼには手つかずの自然がたくさん残っているということ。

問五、——④「同じような試み」とあるが、ここではどういうことを言っているのか。空欄に入ることばを本文中からそれぞれ四字で抜き出さない。

(四字) の力を借りて、 (四字) を取り戻そうとする実践。

問六、——⑤「一肌脱ぎましょう」とあるが、「一肌脱ぐ」の本文中における意味として、最も適当なものを1～5から選び、番号で答えなさい。

- 1、皆で協力する。
- 2、本心を見せる。
- 3、ある物事に集中する。
- 4、本気になって助ける。
- 5、言いたいことを主張する。

問七、——⑥「これこそが真の『共生』というものだろう。」とあるが、「これ」とは何と何との共生か、本文中から十字で抜き出さない。

問八、——⑦「百姓が農産物だけでなく、自然も生産し続けてきたこと」とあるが、これをくわしくいいかえた次の文の空欄に入ることを、本文中から七字で抜き出さない。

百姓は農作物の生産によって存在価値を認められてきたが、一方、(七字)ものを作るといふ営みをずっと行っていたのだということ。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そのころ、母さんはまだ勤めていて、帰りはたいてい六時を過ぎていた。五年生のぼくは、かんたんな家事はひと通りできるくらいにはなっていた。お米をといで炊飯スイッチを押す。豆腐をさいの目に切ってだし素を入れ、味噌汁を作る。洗濯物を取りこんでたたみ、タンスにしまう。掃除機をかける。魚を焼く。肉を焼く。野菜をゆでて盛りつける。社会人の男の一人暮らし程度のこととは充分にできていたと思う。

母さんとの二人暮らしというのは、きつと、そうではない人たちの想像どおりのもので、そのイメージは、ぼくにいろんなことを教えてくれた。良いことも悪いことも含めてだ。

だから、押野という、後ろの席の（自己紹介のときにぼくの背中をつついていたやつだ！）同級生が帰り際、ぼくを野球に誘ってくれたことは驚きだった。クラスメイトからそういう誘いを受けたことなんてそれまで一度もなかったのだ。

ぼくには、いつでももの悲しいようなイメージがつきまとっていたと思うし、実際ぼくはそれとおりなんだし、また、そうしなければいけないんだ、と子どもながらに感じていた。自分が発している雰囲気、クラスメイトは（A）感じ取って、ぼくに遠慮していたのかもしれない。

「枝田だったよな。俺、押野。昼飯食ったら、三丁目の空き地に来いよ。野球しようぜ」

肩を大きくはたかれ、そう言われて、ぼくは反射的に（B）うなずいた。自己紹介があった、五年生になりたての始業式の日のことだ。

なんで押野が突然ぼくに声をかけてくれたのか、ぼくにはさっぱりわからなかった。五年生のクラス替えではじめていっしょになったばかりだったし、自己紹介からして、ぼくとはまったく正反対のタイプのような気がしていた。

ぼくの頭の中は、驚きと疑問でイけど、それよりもただ（C）うれしかった。夢じゃないか、と思ったくらいに。

もしかして悪質のいじめかもしれない、という思いも少しだけ頭をロけど、もしそうだったとしても、それでもよかった。だって、ぼくはだれかにいじめられるということすらこれまでなかったんだから。ぼくはだれの目にも留まらない。Iのような子どもだった。だれかにいじめられる価値があるほどの子どもではなかったし、どういう状況においても、だれかにちよつかいを出される程度にも達してないような影の薄い子どもだった。

その日、ぼくは足早にうちに帰って、押し入れからあわててグローブを探し出した。ずっと前に近所の人からもらったやつだ。革が硬くなっていたけど、サイズはいつのまにかちょうどよくなっていた。はじめてと言っていいくらい久しぶりの感触だった。

ぼくは、少しでもなじむように、そのグローブをつけたまま、炊飯器からご飯をよそい、味噌汁を温め、昼食をとった。さっきのクラスメイトからの言葉を思い出して、なんとなく尻がむずむずした。

時間を約束していたわけじゃないけど、ぼくは一刻も早く空き地に行かなければならない気がした。場所は知っていた。母さんの勤めている会社に行くときに何度も通っていた。したくがすむと全速力で走って三丁目の空き地に向かった。

広場にはすでに数人が集まっていて、その中にはぼくを誘ってくれた押野もいた。押野は土管の上に座って、菓子パンを食べていた。ぼくに気がついて、（D）手をあげた。

「枝田ー こっちだぜ」

びつくりした。自分の苗字をクラスメイトが大きな声で呼んでくれるなんて。初対面といつていくらいのぼくに、まるで親友みたいに声をかけてくれた友人を、ぼくは考える間もなく好きになっていた。

それからぼくたちは、野球らしきことをした。四人ずつくらいに分かれて適当に打ったり、投げたりをくりかえした。ちょっとだけ心配していたじめなんてことはまるでなかった。

はじめて参加したぼくを、そこにいたみんなは何事もなかったように

ハ。それは、

I

みたいに存在感のない

ぼくが II 中になかったという意味ではなくて、昔からの III なじみみたいにあっさり自然に受け入れてくれたのだった。極度の人見知りをするぼくも、なぜかあまり緊張せずにふわふわとなじめた。

実を言うと、ぼくが野球をしたのはこのときが生まれてはじめてだった。ボールはバットにかすめもしなかったし、グローブに触れることもなかった。ぼくが投げるボールは、だれのところにも届かなかった。

五年生男子といったら、たいていはソフトボールや野球に関わっていると思うけど、ぼくには今までそんな機会がなかった。もちろんルールは知っていたし、たまにテレビでプロ野球を観たりすることもあったから興味がないわけではなかったのだけど、ただ本当にそういう機会に

二

のだ。学校の授業でやるのは、せいぜいドッジボールぐらいなものだ。

「得意じゃないみたいだな」

と、押野に言われ、いくらなんでもはじめてだとは言えず、うん、と答えるのがやっとだった。ぼくにはもともと、運動神経という、男の子にとっては重要な意味を持つ神経がほとんどなかったから、もっと前に慣れ親しんでいたとしても、きっと今とほとんど変わらない程度だったと思う。

「めちゃくちゃ下手だなあ」

ほかのだれかがそんなことを言った。「すげーへっぴり」とか「センスなし」とか。だけど、ぼくは何を言われたって、ぜ

んぜんかまわなかった。

だって、すごく、ものすごく、たのしかった。汗をかいて、服を汚すなんてことはぼくにとって、はじめての経験だったのだから。

それが、五年生になったばかりの日の出来事だ。その日のことはよく覚えている。

「あなたの人生の IV はどこですか」ときかれたら、ぼくはまずその日のことを答えるだろう。はじめての経験。ま

さに、社会へと小さな一歩を踏み出した記念すべき日だ。

その年はいろいろなことがあった。あわただしくて、濃密で、そして、ぼくはちっぽけな五年生の子どもだった。(中略)

「えだいち」というぼくのニックネームが決まったのは、始業式のつぎの日にあった。①学級委員を決める投票のときのことだった。投票は、クラス全員に白い紙を渡し、そこに学級委員にふさわしいクラスメイトの名前を書いて、多数決で決めるというものだった。

先生が、みんなの書いた紙を読み上げながら、黒板に名前を書いていった。

「押野」という名前の下に、正の字が増えていくのを見ながら、ぼくは本当に感心していた。五年になってクラス替えがあったばかりで、ぼくなんてみんなの名前もほとんど知らなくて、黒板に名前があるというだけでも 脅威だったのに、押野の下には、正の字が四つと、正にふたつ足りない字が書いてあったのだ。

クラスの半分以上が押野に投票したということになる。でも、そういうぼくだって、押野に一票を入れた。理由はかんたんだ。昨日野球に誘ってくれた、後ろの席の押野の名前しか知らなかったからだ。

昨日の三丁目の空き地での興奮は、ぼくの中にまだまだ残っていて、それを教えてくれた押野にぼくはとても感謝していた。昨日の野球について何か話したかったけど、押野はそのことに触れなかったから、ぼくも黙っていた。ぼくは、自分からだれかに話しかけるなんてことは、はずかしくてぜんぜんできない性質だったし、昨日の今日で、なれなれしく接するのともうか

な、とぼくなりいろいろと考えた。

学級委員というのは、ぼくとかけ離れたクラスの中でもいちばん遠い人だと思っていたけど、そのかけ離れた人物が同じクラスにいるんだ、というあたりまえの事実を、ぼくははじめて知ることができた。

黒板に正の字が増えていく「押野」という名前を見ながら、なぜかぼくが誇らしい気持ちになった。b 気さくな押野は、きつと今までだつてとても人気があつて、みんなもほくみたいに押野のことを好きなんだろうな、と素直に思った。

「枝田くん」

と、椎野先生が突然ぼくの名前を呼んだ。わけがわからず、条件反射的に「はい」と返事をしてしまったぼくを何人かが笑った。

あのときのことを思い出すと、ぼくはかあつと顔が赤くなってしまう。投票の最後の一票を読み上げるときのことだ。もう押野は確実だつたけど、残りの二人が接戦だつたから、全員が注目していた。ぼくの名前が呼ばれたのは、まさにそのときだつたのだ。

「あつー」

と、まぬけな声が思わず出た。黒板には、頼りなげなぼくの名前が書かれた。

枝田 一

だれかがふざけてぼくの名前を書いたのだ。とたんに、真つ赤つ赤になった。

場ちがいにはつんとぼくの名前が書いてある黒板を見るのがはずかしくて、ぼくはうつむいたままだった。はずかしさに舌をかんで、泣きたくなる気持ちをおさえていると、後ろからメモが回ってきた。

『俺だよ。ごめん』

一瞬間のことかわからなかった。でもそのあとすぐに「あつー」と思った。押野だ！ やつがぼくの名前を書いたのだつた。押野のくつくつという忍び笑いがきこえて、ぼくはあやうく泣き出しそうになったけど、休み時間になってまで、笑いの収まらない押野を前にしていたら、真剣に怒るのがばかしくなってきた。しまいには何事かと何人かが集まってきて、涙を流しながら事情を話す押野につられてみんなも笑い出した。自分で書いておいて何がそんなにおかしいのか、と思ったけど、押野が笑う大きな口を見てたら、なんだかぼくもおかしくなってきた。

「『枝田一』って、なんだよお、すっげー笑えた。えだいちだつて、おいおい、頼むよ」

そんなふうに押野は笑つて、その日以来、ぼくはみんなから「えだいち」と呼ばれるようになったのだつた。

「えだいち」なんて、枝豆みたいでいやだな、とちよつとだけ思ったけど、でもぼくはひそかにうれしかった。あだ名やニックネームなんてこれまで一度もなかったから。小さなときは「みっちゃん」なんて呼ばれたこともあったけど、ぼくは女の子みたいな「みつき」っていう名前が好きじゃなかったから、ましてや「みっちゃん」なんて、ものすごくいやだったのだ。

その日以来、「えだいち」というニックネームは、あつという間に浸透して、女子までもがぼくのことを「えだいち」と呼ぶようになった。

ぼくは、相変わらずのさえないぼくだったけど、席順もそのままだつたから、なんとなく押野といっしょにいるようになった。というか、押野が何かにつけてぼくを誘ってくれた。人気者の押野といると、自然と人が集まってきて、ぼくもいつのまにかその中にいるというわけだった。

(椰月美智子『しずかな日々』より)

注 ○はたかれ…たたかれ。○頼りなげな…頼りなさそう。

問一、波線 a、b の本文中における意味として、最も適当なものを次の 1～4 から選び、番号で答えなさい。

a 「脅威」

- 1、非常にはずかしいこと。
- 2、みんなに自慢できること。
- 3、おどろくほどすばらしいこと。
- 4、望んでいない嫌がらせ。

b 「気さくな」

- 1、ずるがしこい面がある。
- 2、親しみやすさがある。
- 3、影響力がある。
- 4、細かい心配りができる。

問二、(B)、(D) に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の 1～4 から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- 1、ひよいと
- 2、のんびりと
- 3、てきばきと
- 4、ぎくしゃくと

問三、(A)、(C) に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の 1～4 から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- | | | | | |
|---|------------------------------|-------|--------|------------------------------|
| A | 1、寛大に
<small>かんだい</small> | 2、気長に | 3、非情に | 4、敏感に
<small>びんかん</small> |
| C | 1、おおげさに | 2、単純に | 3、かすかに | 4、絶大に |

問四、イ 二 に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の 1～4 から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- 1、受け入れた
- 2、めぐまれなかった
- 3、かすめた
- 4、こんがらがっていた

問五、I、IV に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の 1～4 から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- | | | | | |
|----|-------------|------------|-----------------------------|------------|
| I | 1、太陽 | 2、そよ風 | 3、幽霊
<small>ゆうれい</small> | 4、神様 |
| IV | 1、ターニングポイント | 2、セールスポイント | 3、キープポイント | 4、チャームポイント |

問六、II、III にあてはまる最も適当な語を、それぞれ漢字一字で考えて答えなさい。

問七、——①「学級委員を決める投票のとき」とあるが、この内容をまとめた次の文の空欄に入る言葉をそれぞれ抜き出しなさい。

「押野」にクラスの生徒の半分以上が投票し、「はく」はなぜか ア (七字) になった。その「はく」にも一票が投票され、イ (四字) と呼ばれるようになった。

問八、本文の内容を説明したものとして、最も適当なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

1、「ぼく」は家の手伝いを進んでする責任感の強い少年であるが、自分が同級生たちに嫌きらわれていると思っていて、完全に孤立こりつしてしまっている。

2、「ぼく」は他の同級生と同じように、明るくて、リーダーの素質があるように見える「押野」のことを信用できずにいる。

3、「押野」はときどきからかったりもするが、何かと「ぼく」のことを気にかけてくれていて、同級生たちからも好かれていた少年である。

4、「押野」は優しいところもあるが、「ぼく」のおかれている状況に無関心で、相手がいやがっているのに強引に野球にさそってしまった。

問九、「ぼく」が「えだいち」というあだ名を気に入った理由として、ふさわしくないものを一つ選んで記号で答えなさい。

1、自分らしさがあらわれていない名だから。

2、クラスの子たちに呼ばれて「ぼく」の存在感が増したから。

3、信頼しんらいする押野の投票によって生まれた名だから。

4、「みつき」という名前が好きではなかったから。

5、あだ名をつけられることが一度もなかったから。

以下白紙

